

文化高知

2008年9月 NO.145



「黄金の実」 平田明三

〈もくじ〉

よそ者が初めて見た高知・そして住んでみて…	成田大輔	2
高知の謎	内藤裕敬	3
〈沈下橋に松の炎が燃えた〉	門田雅人	4～5
アテラーノ旭をたちあげて 新しいかたちのまちづくりをめざして	山中雅子	6～7
高知県の課題——社会経済の側面から考える(2)	福田善乙	8～9
言葉の現場から⑩ 高知の若者が発するロック ii	OK電算機	10
高知のギャラリー⑦ お茶とギャラリー 1188	柏原健吾	11
第7回 詩のボクシング高知大会を振り返って	塩見由利	12
7月～8月の事業から		13
風俗歳時記・風伯		14～15

よそ者が初めて見た高知・ そして住んでみて…

成田大輔

転勤を命じられ、そして、初めて高知龍馬空港に降り立ち何かしらこみ上げてくるものを感じてから、早いもので半年が経とうとしています。以前私はホテルではなく旅行部門に所属していたので、高知への転勤が決まってからは国内旅行の中四国担当者のところに出向いたり、知らに情報収集活動をしてきたものの、高知の情報はなかなか入ってこない。瀬戸内海沿いの観光名所、企業情報は比較的あるのだが、肝心の高知の情報が入らない。(はりまや橋)〈桂浜〉(坂本龍馬)そして(鯉のタタキ)。この言葉ばかりが異口同音に繰り返し耳に入ってきます。高知は情報の少ないところだな、というのが正直当初の印象でした。

色々と思いついた末、最後は、飛び込んで走りながら考えようと思いついての高知着任となりました。もって生まれた行動派的要素でど

こへでも出かけ何でも食べ、たくさん遊びにのめり込んで全身で高知を享受する毎日です。そんな中で少しづつあれ？と感じている自分自身に違和感を覚えることがあります。住んでみていろいろなることを感じるようになりました。

その一つが野菜の新鮮さ・旨さ(前任地の大阪で安物ばかりだったからか?)、そして、鯉だけではない魚の旨さ。鯉の塩タタキというものがあつたことを初めて知り、トマトの味に感動し、文旦・小夏と続き、今は口に入るものすべてに興味津々の毎日であります。よその地で何度も食したが(ボン酢の味ばかりで)好きにはなれなかつたタタキがこんなに旨いものとは!

高知の食べ物にはまると、初めての自炊生活の買い出しが楽しくなり、食品コーナーの広い大きなスーパーが好きななつてきました。買う物は

少しだが見て回る時間が長い。今まで住んできた福岡・大阪・東京で見たことのないものが結構あるのです。年配の女性の買い物を見ては平気で料理方法を聞き(時々変な顔で見られる)、美味しいトマトの見分け方、有名な生姜の保存方法など貴重な話をたくさん教えてもらい、自分で料理しては一人で感動し、また友人に自慢するのが楽しくてたまらない。料理屋へ行っても板前さんの手元が見えるカウンターに敢えて座るようにしています。

考えてみたら人間結局食べるために汗を流して仕事しているような気がして(私だけかも知れませんが)…。なぜ高知はもつと県外にこの食べ物文化を発信しないのだろうか? そんなシステムはあるのだろうか? そんな今ままで県外にいた自分はずいぶんな疑問が湧いてきました。

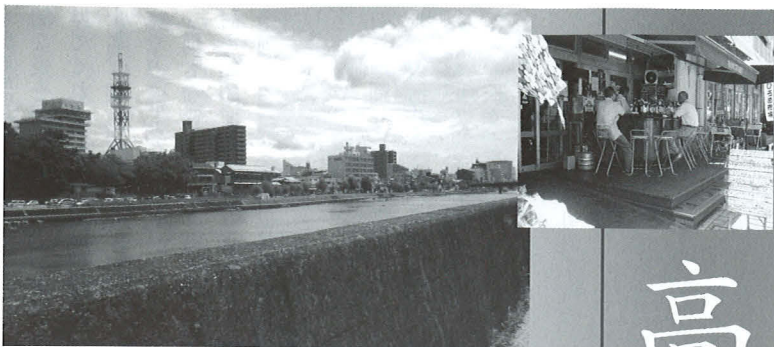
先日弊社の関連の福岡のピアガーデン・駅構内・スーパーマーケットで「高知食博」というイベントを開催しました。県庁の観光課の方も現地まで出張し、高知を大いにアピールしていただきました。大きな反響があり、魚では鯉以外でも二ロギなど大変な人気だったと聞きます。ま

たやはり酒文化の国、お酒の評判もよく、「入手困難につき送れ」とのメールも入ってきています。せっかくな成功したこの「高知食博」を今後も継続させていくことが私の使命の一つだと思えました。私に続く後任者にも高知と福岡の架け橋をより太いものにしてもらいたいと思います。

そしてもう一つ。高知の旨いものを県外からのお客様に広めてゆくこと。出張にしろ観光にしろ、情報収集して現地の評判の店へ行く。何と楽しいことか! 高知へ出張でいらつしやるお客様も同様だと思えます。そんなお客様へのニーズに応え、ご満足いただける情報を提供できるように私の店探しの旅は当分続きそうです。

ある日出張からの帰りの飛行機が高知空港に着いた時、「ああ、帰ってきた」と思いました。そしてふと着任時との気持ちの差が、今の私の中の「高知」と着任時との差なのだろうと思えました。これから先どのくらいの差がでるのだろうか? そんなことを感じながら私の中の高知の旅を続けていきたいと思つていきます。

なりただいすけ／
(西鉄イン高知はりまや橋総支配人)



夏の日射しに輝く鏡川 (右上)『ひろめ市場』の一角

高知の謎

内藤裕敬

内藤裕敬プロフィール

1979年、大阪芸術大学(舞台芸術学科)に入学。1980年10月、同学科の有志により南河内万歳一座を結成する。『蛇姫様(作・唐十郎)』で旗揚げ公演。以降は劇団全作品の作・演出を手がける。高知市文化プラザでの3度の劇団公演のほか、ワークショップ等でも来高。平成19年から高知県高等学校演劇部夏期舞台技術講習に講師として招かれ、毎夏高校生の指導に当たっている。

よろしい。また、指導しながらも指導者にはならず、座組みの一員として一緒に芝居創りをする劇場スタッフの背中も良い。担当の先生方も含め、四十歳以上の年齢差の世代と一緒になつて作業する姿が自然であることが素晴らしい。

芝居はそもそもそういうものだが、現実には、生徒たちの演劇に付き合う大人が少ないし、大人に付き合われると面倒くさい思いの生徒も多い。その距離感が、何故か高知のオレンジホールでは心地良いのです。その謎は街を歩いていても頭のどこかに残るんですね。

夕方、リハーサルを抜け出して、劇場の裏手にある鏡川へ散歩する。私は釣り好きなので、川面と川底を観察しながらぶらぶら行く。

高知の真夏は、私の住む都市よりも空は青く高く、雲は純白だ。それを映す川の流れは透き通り、石の影にじつとして動かない大きなコイがよく見える。その隣にもつと大きなやつがいて、よくよく見ればそつちはスズキだ。河口に近いそこでは川と海との魚が同じ水の中にいる。さすがに一緒に泳ぎはしないが自然にそこにいる姿は、何かうらやましく思える間柄だ。

お腹が減つたので、『ひろめ市場』へ行く。午後七時を過ぎたそこは満員だ。一昔前に流行した屋台村のスタイルだが、未だに盛況が続いているのは少数だ。お刺身、お寿司、カレー、焼きそば、たこ焼きに、トンカツ、中華、etc…。雑貨にデザート、マッサージまである。

相席は当たり前前のテーブルを見渡せば、若いカップル、同僚サラリーマングループ、家族連れ、じいちゃん、ばあちゃん、きつと制服で出入りしないようにと言われている学校もあるんだろうけど、堂々と制服で甘いもの食つてる女子高生。きつとそれぞれの水を泳ぎ、それぞれの水に暮らしているのだけれど、鏡川よりも賑やかに集う。

満腹で通りへ出ると、『よさこい祭り』の最終日が名残惜しみながら最後の盛り上がりの中にあつた。アーケードをはりまや橋の方向へ、途中からUターンしてお城の方へ。もう帰らないこの夏と、またここに帰つて来たい次の夏との境目で、やはり祭りの終わり際は少し寂しい。

まだ終わりがたくない踊り手と見物客の思いは世代を超えて一緒だ。沿道で声をかけ、拍手をおくるそこには、この日の為に、過ごしたこれまでの一年間を共に楽しむ一体感があり、充実と後悔と未来と過去と今がある。老若男女問わず、その風土と世間、時間と生活を土台にここの空気はおいしのだとわかつた。

はあ…なるほど…。いろんな謎を解ける気がした。

ないとうひろのり／
(南河内万歳一座座長)

高知県下の高校の演劇部が集つて夏に合同公演をする。リハーサルから観せてもらつて上演までを、邪魔にならぬよう、目立たぬように客席のすみっこにいる。

迫る時間と戦いながら、その必死がいい。背伸びしようともぐくの

地域挙げての取り組み『米奥沈下橋夏祭り』が終わってから、校区内や街中で保護者や地域住民など出会う人、出会う人「すぐく良かったねえ」とか「沈下橋がすぐくきれいやった」「なんと人が集まったねえ、来年もぜひやってよ」と必ず声を掛けられます。三十年ぶりに復活した盆踊りでした。沈下橋の両側に並べられた間伐材のたいまつは、幻想的な炎を約一時間のあいだ燃やし続けてくれました。参加者は約三百五十名、楽しく温かい手づくりの祭りになりました。

何もないところから、恐る恐る検討を始めて、段々と想いが拡がった企画でした。①学校林の間伐材を使って地域に二つ架かっている沈下橋をライトアップしよう。②地域に伝わる地踊りを高齢者から教えてもらって復活しよう。③支援を申し出ていただいた演奏家と中学校吹奏楽部による演奏会も実施しよう。④保護者・地域有志の手づくりで夜店を出店、花火は持ち寄り花火で楽しもう。以上四点がめあてとなりました。



地域住民による地域住民のための手づくりの夏祭りを企画しました。広い校庭を全部駐車場に充てました。保護者が呼びかけチラシや駐車場の設計図をパソコンでつくってくれま

した。駐車場は量販店方式（誘導員を配置せず、自己責任で駐車してもらう）、七店舗出店した夜店も推進委員の紹介による地元有志の出店と教職員、保護者が負担にならない出店になる企画を考えました。全店完売、みなさんに喜んでいただきました。花火は参加者の「持ち寄り花火」をPTA役員が打ち上げました。

地域とともに四万十川と学校林を活かす

沈下橋に松の炎が燃えた

門田雅人

りません。奈路小（南国市）拳の小（黒潮町）に続いて県内小学校三番目の指定を受けました。

本校のコミュニティ推進委員の構成には、地域に根づいた先達の他に異色の方たちが参加してくれています。アイターンで有機農業を営んでいる村上さん、奥さんの実家四十町でケーキ屋を開店した若者宮崎夫妻、本校の六年生児童もオプザーバー参加しています。以上のような経過を辿り、数回の推進委員会を経て企画されたのが『米奥・沈下橋夏祭り』でした。

盆踊りの地踊りは過去各地全域で盛んに行なわれていました。米奥地域も例外ではありません。しかし、若者が減少して生活様式も変化する中で衰退していったのだと思われます。過去の祭りで、地踊りと子ども相撲は相性のよい組み合わせであったようです。『こっぴ』とか『こりやせ』などの名称で歌と太鼓の素朴な地踊りの歌詞は窪川町史にも採集されています。教職員の呼びかけに添えて、古老や地域で若者時代に活躍していた壮年の人たちが、喜んで児童たちに教えてくださいました。子ども相撲も実施することにしました。

提灯を卒業生の保護者が中心になって設営してくれました。大木の杉の間伐材は大型ベンチになるなど最適な演舞場に変身しました。

米奥小学校は、現在全校児童十八名、小規模複式の学校です。四万十町窪川地区に位置しており、県内では屈指の松葉川温泉を校区に控えています。町村合併により四万十町は淡路島よりも広い自治体になりました。小学校の数も十八校、ご他聞に漏れず『適正規模・適正配置』との名目で統合・合併が検討されている状況です。

高知県には現在、約二百五十校の小学校が広範囲に点在しています。（他に現在休校中が約五十校程度）高知市の他に東部、中部、西部教育事務所が全体を所轄しているのですが、どの地域事務所と比較しても香川県よりも広い面積を担当していることになりました。

先頃の新聞報道によると、土佐清水市では本年度末に十二小学校のうち四小学校休校が決定されたとのこと、津野町も半数である三校、中土佐町でも、二校の休校が決定されています。県下約二百五十校の小学校のかなり多くの部分が、少子化児童数減少と地域経済基盤弱体化、加え

て行政の財政状況のあおりを受けて、今まで以上に休校を余儀なくされるような現状です。

本当に地域の学校をなくして、いわゆる『適正規模児童数』を実現すれば地域は活性化するのでしょうか。複式学級を解消すれば児童の学力が向上するのでしょうか。ますます、高知市をはじめとする市街地一極集中が進み、辺地と言われる地域は疲弊してしまうのではないかと危惧します。また、小規模複式小学校では学力面や生活面全般で十分な発達保障ができないと断定されることにも納得がいきません。地域ぐるみで取り組み、小さくてもきらりと光る自治体馬路村のことを考えます。四万十町道の駅『とおわ』の活力に驚かされます。また、地域挙げての取り組みの先輩・同志として、南国市の奈路地域や大月町の柏島地域の取り組みに学びたいと思ってきました。

とりわけ、小規模複式小学校を大切に守り育てている地域・学校として南国市立奈路小学校とその地域の取り組みは励みになりました。三十名余の児童数の約半数を南国市街地部から受け入れています。『学校なくして地域なし、地域なくして学校なし』の合言葉で地域住民と学校が、

ぎこちない小学生の踊りと地域の高齢者の滑らかな踊り、地区外から地踊りの復活を楽しみにして着物で参加しているご婦人たち、そして、踊りの輪を取り巻く皆さんの参加者の笑顔、三十年ぶりに米奥地域で復活した盆踊りは地域の共同体意識にも火を点けたようです。

米奥地域には二つの沈下橋が架かっています。老斗俵沈下橋は四万十川本流に昭和十年に架けられた現存する県内最古の沈下橋で、高知県有形文化財に指定されています。他方、清水沈下橋は最も新しい沈下橋の一つです。米奥小学校を挟んで二つの沈下橋が並立、真ん中には現代的な源流大橋が架かっています。学校林の間伐材を使って約六十メートルの沈下橋をライトアップする企画は、約六十センチの松材をチェーンソーで何回か縦切りする試行錯誤で始まりました。

地域の協力で学校林から搬送しました。校舎の前で約六十五センチに輪切り、四回縦の切れ目を十センチ残して入れました。推進委員を中心に約八十本を一応完成。保護者の祖父の紹介による有志が約三十本を追加して完成させて

くれました。（これまで学校にはあまり縁のない方々の支援には驚きと感謝）夏祭り当日、材料は二メートル間隔で橋の両側に配置して、廃油を染み込ませた上で点火しました。四万十川の川風に煽られて、間伐材は幻想的な炎を川面に映しました。

ささやかだけれども、参加した小学生や地域住民、老若男女の心に温かい想いが拡がった取り組みになりました。沈下橋の松の炎が、地域で協力・協働するすばらしさを照らしてくれた気がします。

かどたまさと
（四万十町立米奥小学校校長）



新しいかたちの

まちづくりをめざして

山中雅子



「アテラーノ旭」ができて一年と数か月がたちました。この間ずいぶんマスコミにも取り上げられ注目され少々とまどいを感じている毎日です。しかも「アテラーノ」ってどういう意味？と聞かれて、「あてらのか！」とうなずき笑ってもらえるユニークな名前ですからよけい話題を呼ぶでしょう。

そもそも、街が元気になるようなコミュニティの中心になる場所をつくりたいと会を持ちはじめたのは二〇〇六年の春頃でした。

まちの自然を守りたいと活動している人や、まちに銭湯がなくなったことをきっかけに高齢者や障害者のくらしや福祉の問題と取り組んだ人たち、旭のまちが大好きというグループ「旭、まちづくり十ヶ条」を作った人たち、町内会活動をしている

人たち等々、十数名のメンバーが集まりました。

活動母体や思いはさまざまですが、共通しているのは、近年、街の高齢化が進み、空家、空店舗や駐車場が増え人通りが少なくなってきたことを何とかできないだろうかという思いです。

しかしこうした問題は、今の制度や行政の取り組みではなかなか解決できにくく、むしろ私たちのような住民レベルで知恵を出し合い地域の特徴や伝統をいかした方法でまちを元気にしていくのではないかということでした。そして、地域の人々が得意なことや趣味をいかして力を発揮するし、それによってひとりひとりが元気になり、同時にまちを元気にすることにつながるのではないかと。という結論に辿り着いたのです。会を重ね、こうした議論を重ねる

ごとにメンバーは思いを熱くしそのための店舗を探してまちをウロウロしたこともありました。

しかし出発にあたり大きな問題は資金です。あーだこうだという中でメンバーの一人がいました。「まずそれぞれのサイフの中身と相談して出せるお金を出そう。道楽やと思うたら安いもんじゃ。後は募金をつのつたらえい」。そんな言葉に私もそうだ、そう割り切ればいいのだと思っただけです。

そんな訳でまず六、七十万くらいで済ました。その後地域の人たちからの募金も集まり、



合計百二十万くらいで店の改装、備品等を整えることができました。

そして昨年五月十四日、地域の人たちの期待と注目をあびながら開店のはこびとなりました。しかし店舗を整えても、月々の家賃や光熱費の経費が必要です。大きな夢をえがく一方、不安をかかえての出発でした。「案ずるより産むが易し」ということでしようか、「街のお茶の間」を支えてくれたのは六人のお料理上手の人たちでした。各自が週一回の

当番制で食事を作ってくれました。彼女たちは長い間、家族や子育てを通じて食事の大切さ、料理作りのたのしさを知っている人たちです。

その六人のメンバーには、バラン

スの取れた五種類のメニューを二十人分をめどに精いっぱい安全安心の食材を使ってほしいと注文をつけました。

初めはとまどっていた彼女たちも今はすっかり手慣れてきました。食べた人から「おいしかった」といわれるとよろこびと達成感を持ち、次へのエネルギーを得ている様子です。

ちなみに毎日のこの食事の恩恵に浴している私は夏バテのような辛さを感じません。きつと食事が元気にしてくれているのだと思っています。

コーヒー等の飲み物やたまにできるケーキをセットにして三〇〇円というメニューも安くてよるこばれています。もちろん「街のお茶の間」なのですからお茶や冷たいお水は無料です。一日中絶え間なくおしゃべり



た、家庭菜園の人たちで無農薬野菜の勉強会がはじまり「アテラーノ農園」の野菜作りに発展しました。今は少々虫食いや変形の野菜が農園か

が続き笑い顔が輝いています。

ほかに店の壁や柵には所せましと趣味で作った手芸品の販売コーナー、また家庭菜園で作った野菜等も並んでいます。

こんなお茶の間の話題から生まれ

らとどいています。

また、旭の町中を流れる旭川は家庭排水や工業排水、飲食店の油等で汚れていることが話題となり、なんとかしたいと「旭の川を守る会」ができました。会で呼びかけて地域の人、企業、行政そして応援の大学生たちで定期的な清掃活動をしていますし、お米のとき汁を材料にして作る有用微生物（EM菌）を上流の企業から川に流してきれいにすることも試みとして取り組んでいます。

ほか、叙情歌をたのしむ会、さらには「旭のまちづくりを考える会」など活動が多方面に広がり、「会長」という肩書きをつけられてしまった私は、毎日の予定をこなしていくのがやつとで右往左往しているありさまですが、発起人のメンバーは各々が色々な活動の経験者であり、知恵や力を持っていて支えられています。そして何より旭の元町というところは昔ながらのまちで、ちょうど落語の「熊さん八つあん」の長屋の人たちのような人間味のある人たちによって支えられてきました。

出発の際一番心配した運転資金もなんとか捻出でき赤字を出さずにやっています。

それに今年「公益信託高知市まちづくりファンド」のハードコースの

助成を受けることができ、前々から考えていた設備の改善もできました。

しかしやっぱり原点に帰って顧みると、私たちの思いがすべて達成できている訳では決してありません。心配や不安をかかえながら孤独に暮らしている人たちがまだまだたくさんいることを忘れずに考えていかなくてはならないと思っています。

これからはますます高齢化が進み、経済的格差が広がり人と人とのつながりも薄れてしまいがちな今、「お助けセンター」とか「お困りごと相談所」といったものをつくり小さな困りごとに対応していく必要も感じています。

しかし、やりたいこと、やらなくてはいけないことはいっぱいあって「アテラーノ旭」の名前がちよっと有名になっても、まだまだ力は小さくはじめてまだ一年と少しです。夢や理想を大きく持ちながらも、今を大切にがんばることだと思おうところです。

できればアチコチの街に「アテラーノ〇〇」とかいうのができればいいな一と考えています。

やまなかのりこ
アテラーノ旭会長

高知県の課題

—社会経済の側面から考える(2)



■地域際収支からみた高知県経済

福田善乙

高知県の経済規模(県内総生産額)は、二〇〇五年度で二兆三四六〇億円であり、高知市の経済規模は一兆五五六億円である。高知市は高知県の四五・〇%を占めている。

この高知県経済をどのように活性化していけばいいのか。私は地域際収支をキーワードに分析しているの

地域際収支とはなにか

地域際収支(地域際収支ともいう)は、地域間の財やサービスなどの取引における収入・支出関係を示すも

億円の赤字だったから赤字幅が拡大している。

産業別にみると、第一次産業は七三億円の黒字、第二次産業は四七八四億円の赤字(うち製造業は四八五八億円の赤字)、第三次産業は二一九一億円の赤字である。すなわち、高知県は第一次産業は黒字、第二次産業は赤字、第三次産業は赤字という典型的な農山漁村型地域際収支構造である。

また、高知県の自給率は、全体でみると七一・三%、第一次産業七五・二%、第二次産業四七・〇%(うち製造業一八・四%)、第三次産業八六・三%であり、第二次産業、特に製造業が極端に低い状態である。高知県の地域際収支の黒字部門の順位をみると、①耕種農業五四七億円、②漁業二五五億円、③対個人サービス二一六億円となっており、第一次産業部門中心である。逆に、赤字部門をみると、①食料品九八九億円、②商業九五九億円、③化学製品八八一億円となっており、第二次産業、第三次産業中心である。

求められる政策課題

地域際収支にもとづく産業政策は、

のである。

国際間の取引の収支関係を示すには国際収支(貿易・サービス収支)、企業の収支関係を示すには経営収支、家庭の収支関係を示すには家計収支がある。

それと同じように、都道府県や市町村を一つのエリア(または経営体)とみなすと、都道府県には都道府県間の収入・支出関係を示す都道府県際収支、市町村には市町村際収支がある。ここでは、都道府県際収支をみていく。

地域際収支は、各都道府県が発表する地域産業連関表から作成される。地域産業連関表は国勢調査がおこなわれる年に平行して作成される。し

黒字部門は維持・拡大に努めるとともに、赤字部門はなるだけ赤字を縮小して、収支のバランスをとることが基本である。

それでは、高知県の地域際収支の状態から、どのような政策課題が求められるのか。

第一に、黒字部門になっている第一次産業のさらなる発展をはかることである。第一次産業は一九九〇年九八五億円の黒字、九五年九五五億円の黒字だったのが、二〇〇〇年に七七三億円の黒字と黒字幅が減少している。これを少なくとも一十億円の黒字にしていくことが課題である。グローバルの時代で国際的な価格競争のなかにいるが、いま食の安全・安心・安定が求められている時期、十分拡大できる基盤はある。地産地消・旬産旬消を柱に地域内循環に努めながら、県外へ販売する農林水産物の発見・再発見が大切になっている。東京の有名スーパーで高知産ユズが一個四〇〇〜五〇〇円で売られていたが、消費者の動向を的確につかむことである。

第二に、黒字部門の第三位に対個人サービスがきているが、この部門を中心に政策展開することである。この部門は観光の役割が大きくなる。すなわち、観光を中心に交流人口を

かし、実際に発表されるのは五年後であり、最新のものは二〇〇〇年を基準に作成されたものである。

地域際収支は地域産業連関表から作成されるが、それを数式化すると次のようになる。

$$\begin{aligned} \text{地域際収支} &= \text{移輸出} - \text{移輸入} \\ \text{移輸出} &= \text{総需要(総供給)} - \text{県内需要} \\ \text{移輸入} &= \text{総需要(総供給)} - \text{県内生産額} \\ & \text{(それゆえ、地域際収支} = \text{県内生産額} - \text{県内需要でも算出される)} \\ \text{移輸出率} &= \text{移輸出額} \div \text{県内生産額} \times 100 \\ \text{移輸入率} &= \text{移輸入額} \div \text{県内需要} \times 100 \\ \text{自給率} &= 1 - \text{移輸入率} \end{aligned}$$

地域際収支活用の利点

地域際収支を活用することによって、地域経済の状態をトータルに計数的に把握することができる。すなわち、地域際収支によって地

増加させることにより、第一次産業、第二次産業の発展をはかることである。そのことが同時に高知県の弱点となっている商業機能を向上させることになる。

高知県は自然・環境に恵まれ、山・川・海の三拍子が揃い、おいしい空気と食があり、大きな可能性を秘めている。観光客五〇〇万人はそんなに困難なことではないだろう。

第三に、赤字部門のトップになっている食料品部門の発展をはかることである。高知県の食料品部門は一九九〇年八八九億円の赤字、九五年九七四億円の赤字、二〇〇〇年も九八九億円の赤字と一貫して約一十億円の大きな赤字である。これを一〇年計画で赤字ゼロにもっていくことが必要であろう。

高知県は食糧供給基地といわれ、原材料としての農林水産物の産地であり、食品加工業の発展は緊急な課題である。四国四県をみても、徳島県一〇三六億円の黒字、香川県八六七億円の黒字、愛媛県七四六億円の黒字といずれも黒字であり、高知県だけが赤字である。これを早急に改善する必要がある。

この食料品部門の拡大によって、そこに原材料を提供する第一次産業の拡大につながっていくし、この販

域経済を横断的に面としてとらえることができるし、地域を支えている産業部門はどこか、弱点になっている産業部門はどこか、産業部門間の相互関係はどうなっているか、を明らかにすることができ、その対応策を考える契機となる。しかも、数値として明確になるので、実態の把握とともに政策目標を立てやすくなる。たとえば、東京都の地域際収支は二五兆七九六六億円の黒字であるが、そのうち一二兆七六〇八億円は東京にある企業の本社機能によるものであり、他の地域からの吸い上げが大きなことがわかる。

また、愛知県の地域際収支は五兆二〇億円の黒字であるが、これは自動車部門の七兆二二〇六億円の黒字に依存している。もし自動車部門がなければ、約二兆円の大きな赤字に転化することになるのであり、必ずしもバランスのとれた経済構造にはなっていないことを示している。

高知県の地域際収支

それでは、高知県の地域際収支はどうなっているのか。高知県の地域際収支は二〇〇〇年で六二〇一億円の赤字である。一九九五年四九五八

売を担う商業機能の発展にもつながり、商業部門の赤字解消にも役立つことにもなる。

第四に、赤字部門の第二位になっている商業部門の赤字を縮小していくことである。これはひとつ、商業を担っている人たちの努力に負うところが大きい。それにあわせて人材の育成に力を入れる必要がある。私はそのために流通を担っている人たちを中心に総力をあげて高知県マナーケイティング協会を設立することを提案している。

第五に、これまで何度も指摘したことだが、総合的な産業政策が必要なことである。これまでは農林水産業政策は農林漁業者を中心に、商業政策は商工業者を中心に、それぞれ別々な形で政策を作成していることが多かった。しかし、いまは第一次産業、第二次産業、第三次産業の相互連携と総合化した産業政策が必要になっているのである。

なお、詳細は四銀キャピタルリサーチ『四銀経営情報』(第九七号、二〇〇七年七月)と高知短期大学『社会科学論集』(第九三号、二〇〇八年三月)の拙稿を参照していただければありがたい。

ふくだよしお
高知短期大学名誉教授

言葉

の現場から⑪

高知の若者が発するロック ii

OK 電算機

ロックが用いる言葉は基本、言文一致。時代とともに変化する。

有名アーティストが作る全国流通のCD。歌詞に「チョー(超)」が登場して久しい(四年前のオリピンピックですでに「チョー気持ちいい」だった)。「キモい」=気持ち悪い、の略も、「KY」=空気・読めない、のアルファベットの頭文字も、使われた。まあ、いずれもすっかり古びてしまっているが。

若者がみんな、こうした「はやり言葉」に飛び付いているかというところでもない。

ロックとは他者に何かを伝える行為である。本気でロックしようとする若者たちは、一時の流行で使い捨てられていく言葉の前で立ち止まる。考える。個人的で、前衛的であろうと悩む。そうして「多くの人に自分たちの歌を知ってもらいたい」とシンプルで普遍的な言葉にたどり着く。その傾向は強い。有名アーティスト

も、高知の若者も。

無数にある全国的なロックオーディション。その中の一つ。二〇〇六年一月、高知のバンドがグランプリに輝いた。二十代の男性四人組「MANA SLAYP N I L E (マナ・スレイプニル)」。ボーカルとギターを担当する市川幸司が作った応募曲は、本当に素晴らしいものだった。



た。タイトルは「ソングライター」。

疾走感あふれるリズムのロック。しかも、何を歌っているか聞き取れないような歌ではなく、歌詞が前面に出てくるポップさも持ち合わせている。

その歌詞。要約すると――まず、プロミュージシャンになろうと旅立つ青年の心情が、古里の風景とともに歌われる。続いて、都会の路上でポツンと歌っている姿、心に襲くる不安。そして彼は「この前見た夢」を思い出す。「夢」では大舞台で歌っていた。大観衆も歌っていた。が、大観衆が、何を、歌っていたのかが思い出せない。

歌詞は、再び現実に戻る。自分の歌への自信はぐらつき、古里への思いも募り、苦しむ青年。が、彼は思いつく。それは自分の歌を、「強く在れ」という叫びと一緒に歌っていたのだ、と。

ラストはこう結ばれる。
それから幾日か経ち
街角にはギター小僧
「強く在れ」と叫ぶ
我が声は今日も響く



揃えています。他にとらやのようかんやアイスクリームのあずき抹茶かけ、ぜんざいなどもあります。また、土佐ジローの卵を使ったまご焼きに具だくさんの味噌汁、玄米ごはんのセットや野菜たっぷりキーマカレー、玄米タコライスなどなど、お昼ごはんもご用意してお待ちしています。

お茶を楽しんだら三階のギャラリーにどうぞ。

ギャラリースペースでは常設展として数十名の作り手の器や道具を展示販売しています。三十〜四十代の若手作家のつくりだすカタチはシンプルで普段使いできる美しい器です。作家ものの器は、大きさ、フォルム、釉薬のかかり具合など同じ茶碗でもすべて表情が違います。じっくり眺めて、手にとってお気に入りの器を探してみてください。

お気に入りの器は何度も出会えるわけではありません。それは作家ものの器の良さでもあります。素敵な出会いを探しにお出かけください。

二〇〇四年春、市川が二十二歳で紡いだこの歌詞は、ストーリーに破綻はなく、現実と「夢」を行き来するカットバック的手法も絶妙。何より、心揺れながらも未来に向かって進んでゆく、いつの時代も変わらぬ青春の一つの形が、平易な言葉で描かれている。世代を超えて、一九六八年生まれのオジサン新聞記者も心をつかまれた。

市川は受賞時、作詞の流儀を話してくれた。「世界観を大切にしたい。ストーリーがあれば、それも。昔、漫画を描いていたせいでしょうね。言葉？ やっぱり多くの人に伝わるものでないと。そうして「ちよこまか書いたり、一気に書いたりしてます」とノートを見せてくれた。日々の暮らしの中で浮かんだ言葉が、びっしりと並んでいた。

この曲を、これまで何度聴いただろう。その度に、市川らMANA SLAYP N I L Eのステイジが頭に浮かぶ。

加えて、高知でロックを発しているいろんな若者たちの姿も。自ら選んだロング&ワインディングロードを、時に胸を張り、時にめげそうになりながらも歩んでいる姿が。(おーけーでんさんき/新聞記者)

カフェではこれらギャラリーで扱っている作家の器を使ってお茶やお料理を出していますので、実際に使っていただいて器の良さを実感できます。

個展や企画展もほぼ毎月行っています。過去には作家の個展のほか、食のイベント、北欧展などの企画展を行ってきました。ジャンルにとらわれず1188がおすすすめしたいものを紹介できる場として皆様に喜んでいただけたらと思っています。

企画展のご案内

十月三日(金)〜十二日(日)

『戸田文浩うつわ展』

戸田さんは「白」を追い続けて作陶されています。どこか懐かしい感じで白の中にもいろんな彩が見えてくるようです。

十一月八日(土)〜十六日(日)

『四月の魚 関昌生オブジェ展』

(かしわばらけんこ)

お茶とギャラリー 1188

高知市稲荷町二一五二一八

電話〇八八―八〇三―四八八

<http://kouchi1188exblog.jp/>

高知のギャラリー⑦

お茶とギャラリー 1188

柏原健吾

はじめまして。

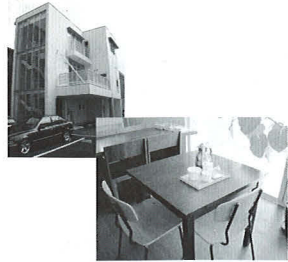
お茶とギャラリー1188(イチハチハチ)です。

1188は高知の街中から車で五分ほど離れたところにひっそりとあります。友人の家を訪ねるような感じでお出かけください。スタッフ一同温かくお迎えいたします。

まず一階でスリッパに履き替えて

二階のカフェへ。

カフェでは全国各地の煎茶、玉露、釜炒茶、ほうじ茶、玄米茶、抹茶



高知市文化プラザ かるぽーと

7月～8月の事業から

宝くじ文化公演・わらび座ミュージカル「火の鳥・鳳凰編」

手塚治虫不朽の名作「火の鳥」が、劇団わらび座の制作でミュージカルとして、7月30日に大ホールで上演されました。

数あるシリーズの中でも、特に人気があり、全編を象徴するような「鳳凰編」。8世紀の日本を舞台に、盗賊・我王と、我王に利き腕を傷つけられた仏師・茜丸との運命の対決を軸に繰り広げられる生と死、そして再生の物語です。

今回は新国立劇場演劇部門芸術監督の栗山民也氏が演出、日本を代表する舞台美術家の妹尾河童氏が美術を担当するなど、現在演劇界の第一線で活躍しているスタッフのもとで制作されました。

「原作の雰囲気や上手に具象化していた」「原作に負けない感動の作品でした」などのアンケートからも分かるように、舞台は原作に忠実に創られており、プロの役者達の歌や踊りに、観客は大いに魅了されていました。特に我王、茜丸、速魚、プチの四人が同時に歌う場面では、ミュージカルの醍醐味を味わっていたのではないのでしょうか。

わらび座は秋田県に本拠地を置き、日本の伝統芸能をベースに、人間の命や再生というテーマに取り組んでいる老舗劇団ですが、近年は意欲的に新しい演目に取り組んでいます。まさにこの公演もその意欲的な姿勢が、うまく観客に伝わったと思われます。

本公演は宝くじ文化公演として、通常チケット料金の半額以下ということもあり、開場前からホール入り口には長蛇の列ができ、また夏休み中でもあったため、親子連れの姿も目立ちました。命という大きなテーマについて、帰って子どもさんと話し合われたご家庭も多かったのでは、と推測されました。



オペラ「リゴレット」事前セミナーを終えて・・・

9月17日(水)のオペラ「リゴレット」公演に先立って、オペラに親しみをもってもらえるようにと、関連事業として二つの講演会を企画しました。

6月19日にウィーン在住の杉本長史氏(日本・オーストリア文化産業交流促進協会理事)を招き、「ウィーン流オペラの楽しみ方」という講演会を開催。会場には公演本番が待ち遠しいというオペラファンが参加し、「リゴレット」の解説に加え、オペラへの知識を深めました。

また、8月20日には、バーデン市立劇場のオペラ公演のプロデュースを手がけている小林陽子氏(音楽プロデューサー)が、「オペラの裏話」と題して講演を行いました。名前の通り陽気な新聞販売店のおかみさんが、どのようにしてオペラを招聘するようになったかをおもしろおかしく話しました。終始笑いが絶えない会場は、すっかり小林色に染まっていました。

両セミナーを終え、「リゴレット」上演が数倍も楽しめそうです。

第7回 詩のボクシング 高知大会を振り返って

塩見由利



「詩のボクシング」とは、「3分間という持ち時間で」「自作の作品を」「声と体のみ、楽器などなしで表現する」というきまりで作品を詠み、どれだけ観客を惹きつけたかを競い合い、複数の審判が判定を下していく『ことばのスポーツ』です。観客が耳を澄ませ、詠み手が声を届けようとして一体となる場で、ごく一般の人たちの心の奥の声と言葉が、こんなに豊かで素晴らしいと実感させてくれるこの「詩のボクシング」に、私は魅了されてきました。

しかし7回目を迎える今年は今までにない困難がありました。高知市文化振興事業団の主催事業として回を重ねてきた大会が、高知市からの予算がつかないという状況になり、実行委員会主体の自主運営となったのです。

4月、常連の参加者へ「今年は予算がつかません」と連絡があり、急遽数名が集まって開催そのものについて話し合ったところから始まりました。全く予算のめどがつかないまま動き出した実行委員会でしたが、高知市文化振興事業団が共同主催となり、会場提供その他のさまざまな協力をしてくださることになって、大きく開催に向けて動き出しました。

7月13日に行われた予選会では、出場者が集まるかという不安の中、26名の朗読ボクサー(高校生から50代まで)が参加し、彩り豊かな予選会となりました。なかでも高校生が11名参加してくれたのは嬉しいことでした。審査の結果、16人が本大会出場選手に選ばれました。

そして8月16日(土)本大会。前日、高知新聞

夕刊に取り上げていただいたのが反響を呼んだのか、当日券も足りなくなるほどのお客さんで、カウントできたのが96名、他にも数名いたのかもしれない。出場者16人にスタッフなどを含め130名ほどの参加者で、リングも設営したかるぽーと小ホールの観客席は満席状態でした。

朗読の内容もレベルが高く、熱戦が繰り広げられた結果、優勝者は高瀬草ノ介選手でした。従来は優勝者がそのまま全国大会への代表になっていたのが、今年からは審査員全員の協議をもって決定されるということで協議の結果、素晴らしい健闘をみせた準優勝者かわねこ選手が全国大会への切符を手に入れました!

観客の皆さんの熱気、心に残る声と作品。今までで最高の「詩のボクシング高知大会」になったと思います。

実行委員は広告集め、募金集め、ポスターやチラシ配布に奔走し、また、わたしたちの活動を知ったたくさんの方にご助言とご支援をいただきました。そうしてできあがったこの大会です。

今回の詩のボクシング高知大会は、まさに「皆で作り上げた場」になりました。心より感謝いたします。現状での課題はたくさんありますが、声とことばさえあれば誰でも参加することができる詩のボクシングという場を、今後とも続けていくことができますよう、なにとぞご理解ご支援をよろしくお願いいたします。

(しおみゆり/
詩のボクシング高知大会実行委員)



景観考

タケムラナオヤ

スタレ

むかしむかし、高知の街ではなんとなく「お城より高い建物」はアカン、という空気があったような気がする。その頃は少なくともお城がこの街にとって大切なもので、それを軸に町並みをつくるのが何となく理解されていた▼景観は行政がコントロールするものであると同時に、その街に暮らす者が意識しなければ維持できない。眺望良好のマンションは一方で眺望を壊す。儲けが取れば、家からの眺めが良ければ、他がどうであろうと構わないという利己意識が景観を壊す▼京都の町屋では、スタレひとつにも気を遣って暮らすことを、新たに町家に暮らす住民は要求される。一個のスタレであっても、その一個から全が壊れることを知っているからだ。今、高知にスタレの意識はない。後追いでスタレを架けようとしても無駄なことを行政は知らないし、私たち自身スタレを架けることの大切さを忘れかけている。

風俗

看板に税金を

高齢化と景気の減速が影響しているのだろうか。そんな景気にはおかない、相変わらず大きな看板広告が街や道路脇の景観を損なっている。広告をする自由はあるのだから、住んでいる街の景観を大事にしたいと思うのも確かだろう。そこで看板広告の大き

さに応じて税金をかけるなどの地方条例はできないものだろうか。建造物の色や形、それにことさら明るい照明にも、あるていど制限や税金をかけてほしい。そうすることで大きな看板広告が少なくなり、街の品位が高まってくるのではないかと。それに加えて、ビルや住宅などの建築の際、ビルであれば道路からどれくらい引いて建てるかとか、植樹などの緑の部分をどれくらいとっているかで減免処置をとるようになるとかできないものだろうか。住宅であればブロック塀やコンクリート壁は不動産税を高くし、生け垣や低い塀にすると税を安くするとかできないものだろうか。こうすることで、殺伐とした街はいくらでも潤いが出てくるだろうし、温暖化対策にもなる。なによりもこれだけ大きな看板があるのだから、地方税収の確保につながるのではないかと。

(森)



Original goods Artist goods Ticket

かるぽーとミュージアムショップでは、横山隆一記念まんが館オリジナルグッズをはじめ、県内で活動を続けている作家の作品展示・販売、県下の文化施設で行われる様々なイベントのチケットを取り扱っています。

〒780-8529 高知市九反田 2-1
高知市文化プラザかるぽーと 3階
Tel 088-883-5052
毎週月曜休業（祝休日の場合は営業）

今号の表紙

「黄金の実」

平田明三

庭の小手毬の枝に巻きつき花を咲かせ、やがてまん丸の実を付け星のように光る「ヘクソカズラ」。「ヤイトバナ」とも言われている。絵のタイトルは「黄金の実」。日本画を始めて8年となったが、私の絵もやがて黄金の実をたくさん付けられるようにと、毎日筆を持っている。

(ひらたあきみ)

高知を撮る

第24回写真コンテスト入賞作品

競演場（鳴子踊）

(昭和30年 高知市 はりまや橋)

川崎 善一



第2回鳴子踊りに、はりまや橋（東側）が使われ、たくさん見物人で賑わいました。

「修繕費無料・家賃無料の時代」は終わりを告げたと云えるでしょう。これは「はじめての環境経済学」（ジエフリー・ピール著）の序文にある言葉。わたしたちは地球に住まわせてもらっているが、家賃を踏み倒し、メンテナンスも疎かに、乱暴に使ってきたことになる。近年の異常気象にも見られるように、地球は病気になるまで出している。わが身を振り返っても、車は必需品だし、エコバックもつい忘れてしまう。会社ではOA機器の発する熱のためエアコンはフル稼働、排紙はすぐに段ボールいっぱいになる。まったくもって態度の悪い借家人である。

「環境」



風俗歳時記

でも、これでは他力本願。まずはわたしたち二人ひとりの地道な実行だろう。ガソリン価格の高騰は、むしろチャンスかもしれない。少しの不便は、地球への家賃返済になるのだから。

(日向夏)

夜読むのが辛くなってきた。街中でマンション暮らしの友人は「エアコンを少し我慢したら、アセモができたよ」と笑っていた。「快適」は悪魔のささやき。エコは、人間の「エゴ」の闘いでもある。さて、今年から「ふるさと納税制度」が始まったが、高知市は「環境維新」と謳い、寄付金は高知市の森・里・海の自然を守り育てるために使う、とある。最近知ったのだが、高知県は年間の日照時間が日本一らしい。ソーラーエネルギーの活用技術の開発が進み、微熱の続く地球を冷ます氷枕の役割になるといい。高知発の取り組みになれば嬉

(財)高知市文化振興事業団自主事業のご案内

文化高知 No.145
2008年(平成20年)9月1日発行

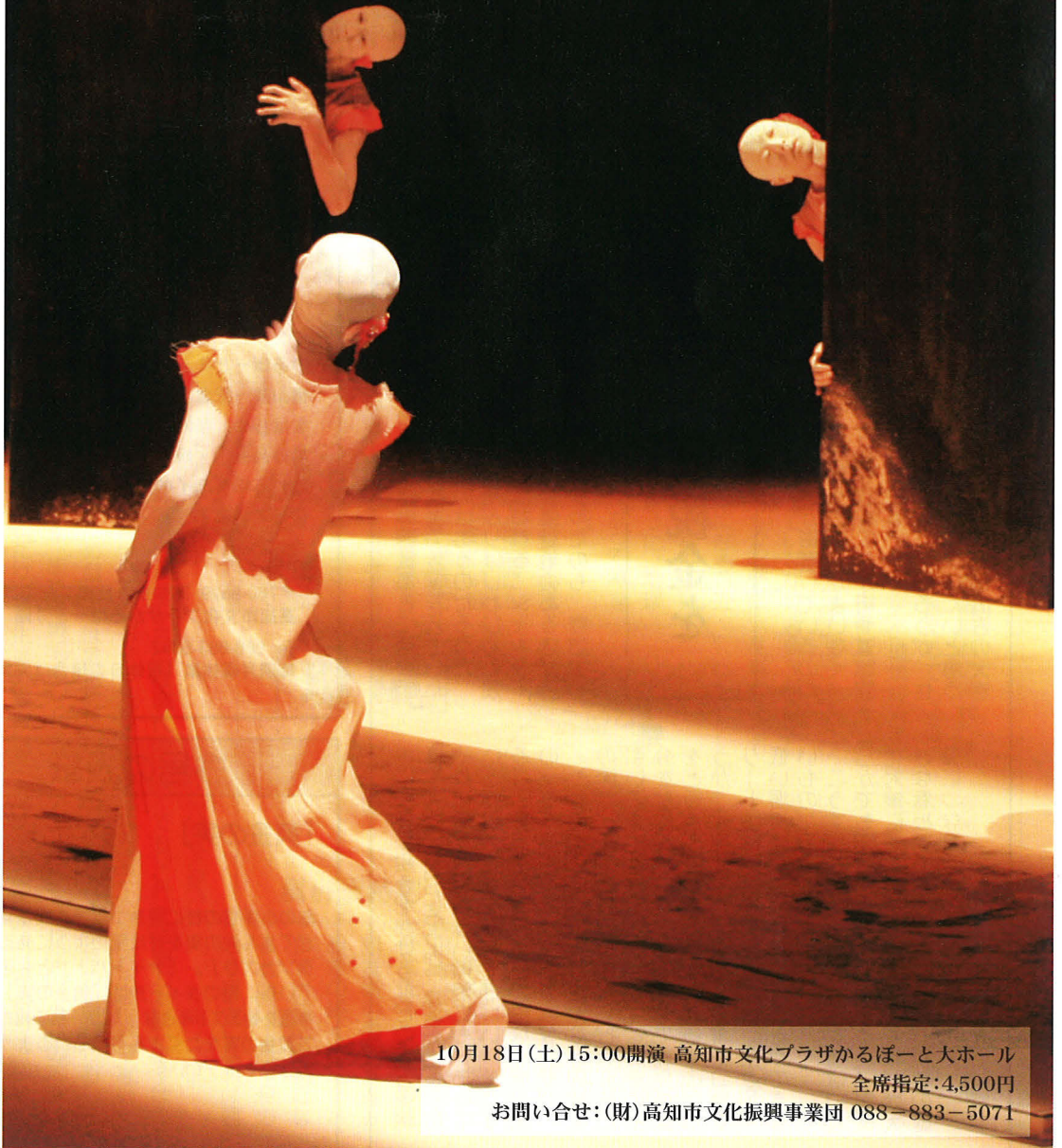
財団法人 高知市文化振興事業団

〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5011(代表)郵便振替01680015-14889

時のなかの時—とき

TOKI

山凌塾
SANKAIJUKU



10月18日(土)15:00開演 高知市文化プラザかるぼーと大ホール
全席指定:4,500円

お問い合わせ:(財)高知市文化振興事業団 088-883-5071

<http://www.bunkaplaza.or.jp>

E-mail bunshin@i-kochi.or.jp